

主観的側面に関する質問紙法の認知理論的検討

妻 藤 真 彦

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第54号抜刷）

論 文

主観的側面に関する質問紙法の認知理論的検討

A problem of psychological questionnaire method : a cognitive theoretical aspect.

妻 藤 真 彦

キーワード：質問紙法、自伝的記憶、尺度評定、認知理論、記憶構造
questionnaire, autobiographical memory, scale rating, cognitive theory, memory structure

主観的側面に関する質問について“自分にどのくらい当てはまる”、あるいは“そのように感じるものがよくあるかどうか”などを評定させるタイプの質問紙は、心理学だけではなく広い分野で重要な研究の道具となっている（ただし、ここでは主観的側面という言い方を用いるが、これは記述の便宜のためであり、このような質問紙が意識内容を測定しているのか、メタ意識的内容であるのか、あるいはそもそも意識内容自体に関する評定であるのかどうか、未解決の問題だと思われる：この点に関する著者の立場と議論は以下を参照されたい、妻藤，1992；1994；2006；2007a）。

尺度評定自体については、そのメカニズムの検討は古くからあり詳細な理論まで発展している（e.g., Petrov & Anderson, 2005）。しかし、これまでそのような回答が、どのような情報を評定した結果であるのかという問題設定はほとんど見られなかった（妻藤，2006；2007a）。

もちろん、回答の偏りや歪みを生じさせる要因についての検討は行なわれてきており、一般論的質問と個別的質問では、同一回答者でも乖離を示す場合があること（e.g., Eiser, 1994）や、ある対象の印象（例えば色のイメージ）を尋ねる際に、実物を見せた場合と言葉で示した場合とでは結果はかなり違ってくる（e.g., 小嶋，1975）などの研究は古くからある。

しかし、妻藤（2007b）は他者の行動記述に対して、どの程度意図的であったかを推定する質問紙について、その評定に関する確信の度合いも同時に測定し、両者の間の関係を検討した。このような判断において数値的評定が実は不可能であり、意図的かそうでないかという2値判断しかできない場合であっても、その判断に関する確信の度合いを変換して意図性の強さ評定としてしまう可能性も考えられる。この場合、各質問項目の中で意図性評定値と確信度の間の相関係数（項目内個人間相関）を求めたとき、この係数はその項目に関する意図性の平均値との間に直線関係（極めて1に近い相関）を示すはずであり、また意図性の平均値が尺度の中央の値より小さい項目では、負の値であるが、中央の値より大きい項目では正になるはずである（この関係について詳細は、妻藤，2007b；2008a参照。確信度自体が何を示す尺度であるのかという問題については、Saito, 1998；2003；2004を、また確信度と信号検出理論との関係については、妻藤，2000；2004を参照）。妻藤（2007b）の結果では、単に具体的に行動だけを記述した文を呈示した条件では、この値は極めて1に近かったが、その行動の原因（その行動を行なったときの事情）や理由（その行動を行なった人物の内的理由）を付加した文を呈示した条件では、この係数は0.9よりも小さくなった。妻藤（2008a）のシミュレーションの結果と比較する

と、前者は意図性に関する2値判断が確信度と合成されて評定値になっていた可能性が強い。また後者は、逆に、確信度の方が意図性の評定の難しさによって影響されていた可能性が強いということになった。

まだ十分な証拠とは言えないが、このように殆ど同じタイプの質問項目である場合ですら、2値判断が基本になっていることを伺わせるものと、量的あるいは量的なカテゴリー判断ができることを示唆するものがあるとするなら、まだ質問紙法には解明すべき点が多く残されているように思われる。

評定過程の性質について検討する方法の工夫は引き続き進んでおり、例えば椎名(2008)は、質問文と評定尺度直線をスクリーン上に呈示し、回答したい尺度値の位置にマウス・カーソルを移動させてクリックするという新しい測定法を考案した。これによって質問文から回答への軌跡を計測でき、いったんある尺度値の近くに移動した後で、さらに動揺を示した後、結局その位置に留まるか他の尺度値に移動するなどの反応パターンが記録可能になるため、通常の反応時間測定よりも詳細な検討を行なうことができることである。このような方法を用いた評定判断過程の研究は、今後新しい側面を開く可能性があるといえよう。

上記のように新しい方法の工夫が行なわれ始めているが、本稿ではそれらを生かすための理論的な面の検討を行なう。主観的側面を測定しようとしたとき、どのような性質の情報が評定過程に入力されるのか、そしてその相違が評定の結果に影響する可能性を検討し、複数の理論対立を解消しようとするときの確証・反証に質問紙のデータが使用されるなら、信頼性・妥当性だけではなく評定過程への入力情報の性質をも考慮する必要があることを指摘し、そして少なくとも区別すべきだと想定される情報の種類をリストアップすることが本稿の目的である。もちろんこのリストは現時点で理論的議論から導かれるものであって、リストの妥当性の検討は今後の問題である。

1. 理論的問題設定

織田(1978)は、5段階や7段階等で回答する尺度

評定の性質が、絶対判断というよりも比較判断に近いことを示している。そうだとするならば自分自身の主観的側面に関する評定は、次のようないくつかの要因によって変動する可能性があると考えられよう。ただしここでは、外部からアンカーが与えられない場合に限る。明るさ判断のように、基準になる明るさ刺激が与えられていたり、何かを見る(聞く等)の刺激呈示に対して、そのときの印象や見えの評定も除く。ここで問題にしているのは、“よく不安になる”とか“生活に満足している”というように外部基準が与えられない質問であり、主観的側面の中でも感覚・知覚のような何らかの刺激に対して生じる意識現象でもないようなものの測定だからである。

まず想定されるのは、基準の設定に関して生じる自分自身の中での比較である。これは2通り考慮すべきだと思われ、(A)その質問セットの中での質問間の比較、(B)特定項目に関する、本人の異なる時点間の比較である。(B)が関与するのであれば、現在の状態を評定するときですら、記憶が関与することになる。ここで言う記憶はかならずしもエピソード記憶であるとは限らず、後述するように自分自身に関する意味記憶である場合も想定する必要がある。さらに、自分だけではなく、社会的比較も関与する場合があると考えておくべきである。つまり(C)周囲の人々との比較であり、どのように周囲を認知しているかも関係するであろう。特にライフサイクルにおける大きな変化(入学など)が起こった前後では、この面の影響が大きくなる可能性を考慮するべきであろう。また(D)メディアからの情報との比較も影響するかもしれない。

2. 理論的問題点の整理

質問項目内での比較 Parducci(1965)は、各評定値間の間隔が等しくなるように回答しようとする傾向と、質問セットの中で各評定値の使用頻度を等しくしようとする傾向の両方が働くという仮説を支持するデータを得ている。すなわち質問セット内で、各評定値の使用頻度が質問セット内ではほぼ等しいときと、頻

度分布に歪度があるときでは結果が異なってくる（文脈効果）。そしてParducci（1982）は視覚刺激の評定について、頻度分布を操作して文脈効果の程度を検討し、尺度の段階数が多くなるほどこれが減少して、マグニチュード推定法になると、まったく消失するという予測も確認した。またWedell & Parducci（1988）は幸福感の評定についても仮説に合致する結果を得ている。

ただし、Haubensak（1992）は回答を始めたごく初期の段階で評定の基準が決まってしまうというモデルでも、文脈効果を説明できると主張している。そして、それへの反論（Parducci, 1992）や、アンカー群の学習と競合を仮定する包括的な並列分散学習モデルも提案されている（Petrov & Anderson, 2005）。

議論は残っているとしても、これらの研究から導かれるのは、少なくとも質問紙の最初の方に、どのような項目が並んでいるか（どのような回答が多くなるか）が評定の内的基準を設定するということである。そうだとするならば、質問セットがすべての回答者について同じ順番であったデータを因子分析等で分析したときの因子構造と、異なる順番に並べ替えたときには異なる結果が得られる可能性がある。もちろん、そのような並びで得られた結果が一定の信頼性を持ち、行動に関して妥当性を持つなら、実践的目的に合うような“検査”として問題はない。しかしその測定結果を用いて心的機能あるいは内的現象を記述する理論の検証を行なおうとするときには、この点は看過できない問題となる。回答の尺度自体が変化した結果が混入している場合、特定の理論にとって一見不利なデータだとみなされてしまうことがあり得るからである。

もちろん対立理論の関係がかなり大きな相違を予測する場合は話が別である。もしA説の予測が“特定の行動Xが起こる”であり、B説では“Yが起こる”というようなものであれば測定自体が不要であって、単に“見る”ことで、あるいは“発話内容・ナラティブ”を記録するだけで、どちらの理論を採用するかを決めるのに十分な場合もあるだろう。しかしそれだけでは識別が難しいとき、例えば片方の説では“Xを示

す人がYを示す人より多い”であり、他方は逆の関係を予測するようなものなら、人間の頻度（確率）判断は錯覚を起こしやすいので（e.g., Lagnado & Sloman, 2004）、一定の手続きを踏んだ測定が必要となる。そうだとすれば、2つ以上の対立理論の研究が進んで各理論が精密なものになるにつれて、各々からの予測が微妙な相違になっていくために、数値的（量的）測定による検証でなければ、どの理論が生き残るべきかを決定できなくなる。つまり複雑な測定法と統計法を利用せざるを得なくなるのである。心理学研究の多くで数値的測定が行なわれるのはこのためであり、人間を数値で表現することが目的ではない。もちろん検査の開発と利用については、程度の判断基準やカットオフを定めるために数値自体が重要になる場合もある。そして後者だけではなく前者の場合であっても、各測定法が当該の現象に対して線型の（あるいはそれに近い）結果を生み出すのかどうかによって、否定すべきでない理論を否定したり、あるいはその逆の結論を導いたりする可能性が出てきてしまう。

すると、質問紙を各理論からの予測を確認・反証する手段として（かなり実験による検証に近い手段として）用いるのであれば、質問項目の提示順は回答者間でランダム化されている必要があろう。少なくとも複数の提示順が用いられていて、評定の文脈効果を変化させたデータセットを合わせて分析すべきである。とはいえこの問題点は、この方法で相当程度解消できると考えてもよいと思われる。また妻藤（2007b）が工夫したように、各質問項目の中で、ある集計を行なってしまうことで、項目間の尺度変動があっても最終的分析に影響しないようにする方法を、より一般的に開発できればこの問題は基本的に解消する。

3. 異なる時点間の比較（記憶の問題）

上記のように、項目各々に回答するうちに尺度の基準が定まってくるだけなら、まだ対処しやすいと思われる。感覚・知覚判断の場合のように呈示された刺激に対して判断するのであれば、判断を繰り返す

うちに、刺激セットの中で“もっとも明るい刺激”や“もっとも暗い刺激”、そして明るさの頻度の偏り等は、その実験の中で参加者の尺度基準を（変動させながらも）統計的にはある安定状態に導くことになる。

“しばしば不安になることがありますか”というような質問に関する評定を考えてみよう。その他の質問として“しばしば先のことも考えずに行動してしまう”という質問が、その前にあったとすると、不安に関する質問の評定基準は、その前の質問への回答に基づいて調整される。いくつかの質問に答える内に、評定基準が一定のところ収束するか、あるいは各アンカーは変動しながらも、競合の結果特定のアンカーが勝つことで評定が収束していくかということになる。もちろん、尺度値の使用頻度を均等化しようとする傾向がアクティブであれば、質問セットの並べ方によっては、かなりの相違を生み出すことにはなる。

しかし、特定の質問に限って考えた場合、感覚・知覚実験のように“同じタイプの刺激が試行ごとに強度を変えながら呈示されていくこと”に相当するのは、むしろそれまでの（不安を感じた）経験の記憶になる場合があり得る。質問が“今食べた昼食メニューは気に入りましたか”であれば、まだ“現在”の時間枠の中にあるその特定のエピソード記憶ひとつに対する評定である。このタイプの質問ばかりのセットであれば、おそらく上述の感覚・知覚実験の場合と（理論的には）同等に近いものだと考えてよいであろう。それに対して、“しばしば不安になる”は、そのときに生じている感覚・感情等ではなく、頻度に関する判断を含んでいる。その判断の対象がこれまでの不安経験に関するエピソード記憶の集合であるのか、それとも自己に関する意味記憶なのかという問題があると考えられる。つまり自伝的記憶の構成成分の問題である。次節で示すように記憶システムの構造について、まだ議論の多い面が残っているが、それでも各仮説の共通部分を取り出してみると、すでに定説と見なしてよいような心理学的要因を列挙できると思われる。

記憶システムの構成 佐藤（2008）のレビューによると、自伝的記憶には視覚的にイメージできるもの

（自己の体験として想起）と、視覚的にイメージはできないが“そういうことがあったことを知っている”というものがあり、また自己スキーマも含まれるとする立場から、これらをつないだ個人史やライフストーリーまで含める立場まであり、定義上あいまいな面が残るとされる。しかし自伝的記憶の中にエピソード記憶成分と意味記憶成分があることについて異論はない。

これまでエピソード記憶と意味記憶は、Squire & Knowlton（1994）による分類に基づいて宣言的（陳述的：declarative）記憶として一括される傾向が強かったが、これを別の実体として（Tulving, 1983）分けるべきだ（Baddeley, 2004）とする立場も強くある。しかし統一トレース説も、保持について基本的には同じトレース（あるいは脳内の部位）を仮定しつつ、記銘と保持については異なるプロセスが関与する（e.g., Kinder & Shanks, 2003）。この稿の文脈では保持（トレースの構造）ではなく想起が問題なので、多重トレース説（Moscovitch et al., 2005）と区別する必要は特にない。むしろ以下の文脈で重要なのは、自己評定過程の検討において、自伝的記憶の中のエピソード記憶成分と意味記憶成分各々について、想起の性質に相違があることを考慮する必要があるかどうか、またそれに関連して意識の様相の相違（後述するautonoeticとnoetic）の違いも、自己評定に関与するのかどうかである。

Moscovitch et al.（2005）のレビューによると、宣言的記憶に関与する脳領域は非常に多いが、特に海馬と乳頭体（mammillary body）そして前部視床核（anterior thalamic nuculei）から成る海馬系システムに損傷がある人は空間記憶と自伝的エピソードを代表する情報の想起に欠陥を示す。ただし再認は損なわれていない。また海馬傍皮質も空間記憶に関係がある。他方、嗅周皮質（perirhinal cortex）・視床背内側核から成る嗅周皮質系システムが損傷した人は再認に支障を示すようになる。他方、意味記憶は主に外側および前部側頭皮質と腹外側前頭前皮質（通常は左半球）を含むとする研究が多く、海馬・内側側頭葉のダメージに

よって生じる健忘が生じて、意味記憶はかなり生き延びているとされる（ただし、意味記憶も記憶時には海馬系が必須である）。このように少なくとも想起と再認に関してエピソード記憶と意味記憶は各々異なるシステムが関与していることを示すデータがかなりあり、彼らは想起・再認だけではなくトレース自体がエピソード記憶と意味記憶では異なっているという多重トレース理論を提案している。

ただし機能的脳画像の研究も含め、まだ統一トレース理論との対立を決定的に解消するデータが得られているわけではないとされる。矛盾するデータが得られる場合があり、その原因として脳損傷研究において障害部位が一定ではなく広がり、個人差があって、なかなか決定的結論にいたらないこと、また機能的脳画像が得られても、そのときに参加者が行う心理学的課題の設定とコントロール条件がどのようなものであれば良いのかについて、まだ心理学面の研究が不十分であるために生じている問題もあるとされている。遠隔記憶（remote memory）が関与する活動は、上記の他にも左右の半球に渡って広くあり、前頭前野や小脳の関与までである（Moscovitch et al., 2005）。つまり、特定の機能（例えば自伝的記憶の中の自己像スキーマ成分）について特異的に関与する部位を決定するには、どのような心理学的課題をコントロール条件（比較条件）として、両者の間の活動量や活動体積を引き算するべきなのかが問題になる（Moscovitch et al., 2005）。言いかえると、脳スキャン中にどのような心理学的課題を行なわせて比較すればよいかは、心理学側で十分検証された理論あるいは法則が必要なのである。

またMoscovitch et al. (2005) は、繰り返し体験されたエピソードから共通点が抽出されて意味記憶を形成すると考えているが、Tulving (2002) はそれとは逆の階層的処理システムの仮説を提案している。彼の定義によると、想起の内容に自己が含まれており、自分自身の体験としての知覚的成分を含んでいるとき（自己、autonoeticな意識、および主観的時間が含まれるとき）エピソード記憶であるとされる。

そうではなく、そういうことがあったことを“知っている”が、体験の具体的内容は想起されないとき（noeticな意識）に意味記憶と言う。そして宣言的（陳述的）記憶に関するTulvingの統合記憶モデル（SPI）は、符号化は系列的であり（serial）、保持は並列（parallel）、検索は独立（independent）だというものである。具体的には、知覚処理装置は、これ自体が知覚的経験情報を保存しており、単独で刺激・知覚対象の識別（同定）を行なうことができる。このプロセスの上向出力が生じたときには、この情報が意味記憶プロセスに入力され、ここで意味的情報（エピソードの“存在”や“名称”等を含む）の把握と保持が生じ、このプロセスだけでも“〇〇の事実があった”、“xはyである”などを検索できる（knowing）。そして、意味記憶システムからの上向出力が生じたなら、（自己、autonoeticな意識、および主観的時間が含まれる）エピソード記憶が形成され、これを検索することで特定のエピソードを体験的に想起できる（remembering）。

このようにエピソード記憶と意味記憶について脳領域の相違があることは確かだとしても、そのシステム構成・処理構造について、まだ統一理論が形成されていない。しかも記憶材料によって検索等に前頭前野の関与の相違があるとする研究もある。ある種のエピソード記憶、つまり課題として何らかの項目リストの記憶を行い、かつ想起するような状況での記憶（リストのエピソード記憶）と、過去にあった出来事について、自然に記憶したエピソードを想起するとき（追体験的自伝的記憶想起）では、前頭葉に関して（両方の場合で活動はあるにも拘わらず）活動部位の相違が発見されており、リストのエピソード記憶では、右の背外側前頭前野中央部の活動の報告例が多いのに対し、自伝的記憶想起では見られないこと、また左の腹内側前頭前野の活動が前者ではマレなのに、後者ではほとんど常に見られる（Gilboa, 2004）。彼の解釈では、自伝的記憶が直感的な“正しさのフィーリング”（活性化された自己スキーマと整合的であるかどうか）に頼っており、他方リスト記憶では（抜け落ちや誤り、

不要な繰り返しを避けるため）より意識的に詳細化されたモニタリングを伴うとされる。

また、もうひとつの方向での問題点として、ある状況で生じた感情を、他の人から隠そうとすること（表出抑制）が認知コストを持つとするなら、そのことがエピソード記憶の質や情報量を減少させる可能性があるということである。まだ十分な証拠が蓄積されてはいないとされるが、実験的な条件操作（固定効果）と、自生的現象間の相関の両方で、これを支持するデータが報告されており、また表出の抑制だけではなく情動自体を抑制しようとすることも同様の結果を示している（Richards & Gross, 2006）。

さらに自伝的記憶の意識的側面の研究では、年齢による相違も示されている。Piolino et al. (2006) は若年から高齢までを比較し、自伝的記憶のremember反応（autonoetic意識の指標）が年齢によって減少してknow反応（noetic意識の指標）が増えること、またそれと同様に自分自身の視点での想起（field view::空間イメージ系の研究ではinside perspective）が減少して、シーンを外から見ているような想起（observer view:空間イメージ系の研究ではoutside perspective）が増えることを示している。この解釈として、高齢になるにつれて知覚的詳細の想起が失われるにつれて、そのようなことがあったという意味記憶成分の方に基づいてシーンが再構成されるために、外部視点に移行するのではないかとされている。

Heaps & Nash (2001) は、実際にはなかった出来事の虚記憶（false memory）が発生したとき、外部視点で“想起”されることを見出ししており、もし知覚的詳細が失われたときに、虚記憶の発生と同じような処理によって、シーンを新たに作りだすと仮定すれば、両者の結果は整合的だと思われる。ただし、Heaps & Nash (2001) は、虚記憶を繰り返し“想起”すると内部視点に移行するという結果も得ており、この点の解釈が必要である。つまり、Piolino et al. (2006) の解釈が正しいければ、高齢になっても、それまでにくり返し思い出していたような記憶の場合には、かならず内部視点になっている必要がある。この点のデータは

ないが、高齢群では自発的想起が減少し、“うながされて”あるいは想起手がかりが呈示されて思い出す割合が増えているけれども、field視点（inside）での想起もなくなるわけではないので、この解釈の状況証拠はあるとしてよいであろう。

自己評定の記憶ソース このような記憶研究から、自分自身に関する質問紙への回答について、測定されている内容と評定の尺度自体の変容を検討するために、現時点で考慮すべき記憶要因を挙げるとすると次のようなものが含まれるであろう。

主観的側面に関する評定が、何らかの刺激呈示あるいは記述文に対して（a）“質問に回答している時点という意味での今現在、それに対して感じる内容”の評定である場合、（b）最近の自分に関する評定、（c）過去の自分に関する評定。という区分が必要であろう。ただし（b）と（c）は、さらに3つに区分する必要がある。つまり（b）であっても、また（c）の場合は当然、（bc-1）autonoeticで、かつfield（inside）視点での想起が生じて、それに基づいて質問への回答を判断する場合と、（bc-2）“そのようなことがあった”という記憶だけ（noetic）であったり、あるいはシーンの想起があってもobserver（outside）視点になっている場合、そして（bc-3）自己像スキーマ（自伝的記憶の中で抽象的意味記憶になっている成分）を評定値に変換するだけの場合である。

さて、上述のようにエピソード記憶の集積から抽出された共通成分が意味記憶を構成していくという説と、むしろ意味記憶の方が先行するという仮説の両方がある。この点が解決されないと（b）（c）の場合について完全な形での自己評定過程理論を構成できないとしても、しかし両仮説を少し検討すると、当面はこの問題を回避した形で評定過程の方の研究を行なうことも可能なように思われる。というのは、Tulving (2002) のSPI理論は機能的側面と主観的側面を統合した形のものであるのに対して、他の多くの研究者が想定しているエピソード記憶と意味記憶の関係は機能的な面だけに基づいた仮説に、後から主観的側面を割

り当てているだけだからである。Tulvingはautonoeticな意識が進化の上で後になって成立したはずであることを前提として、（“そのようなことを経験済みである”という内容も含む意味での）意味記憶の方が先に生じるとしている。この仮説では、一度だけの経験であっても“○○のような出来事・経験・事実”が存在したという意味記憶と、その出来事の知覚的体験を含むフィールド視点の“エピソード記憶”の両方が残ることもある。それに対して、例えばMoscovitch et al. (2005)は、意味記憶について“複数の出来事の共通情報”だとしており、実は同じ用語を用いていても微妙に内容が異なっているからである。

Moscovitch et al. (2005)の研究は、むしろ宣言的記憶の定着過程（consolidation）が終了することによって、想起に海馬系システムの関与が不要になるという従来の理論では説明できない現象の追求が主目的である。共通情報の抽出と蓄積に関する意味記憶は定着過程を経て内側側頭葉ではない部位へと移行し、それによって海馬系システムの関与なしに想起できるようになる。他方特定の出来事に関する“エピソード記憶”は、記録だけではなく想起においても海馬系システムの関与が必要であり、そのために逆行性健忘で中心的に失われるのに対して、genericな出来事記憶や自己像スキーマに関係する意味記憶の損傷は少ないとされるのである。これは数種類の認知症に関する心理学的側面の区別・説明にも有用であると考えられている。また単一事象のnoeticな検索は再認記憶（familiarity有無の判断）として確認され、それは海馬系システムではなく嗅周皮質系システムが関与するとして理論の中に取り込まれてはいる（ただし、noeticな“想起”についてはあいまいな点が残るようには思われるが）。

そうだとするならば、本稿の目的からすると、単一事象のnoetic表象が成立することと、複数の事象にまたがる共通情報としてのnoetic表象の両方が成立し得るということだけを考慮に入れることで、それらの成立メカニズムは不問としてもかまわないと思われる。

自己評定について、まずautonoeticである（bc-1）で

は、かなりの程度、感覚・知覚実験に近いということになる。もし質問セット内のすべての項目が（bc-1）であるのなら、“質問セット内の比較”と同様に考えればよい。ただしそのエピソード記憶の正確さ、くり返し“想起された”ことのある虚記憶が含まれていないかどうかという点については、解釈上の配慮が必要である。しかし、このような質問セットの場合は、実際にそれらの事象が起こった時点でどのように感じたかではなく、回答時点における自分自身について、そのように意識しているのだと考えてもよいであろう。

他方、（bc-2）ではgenericな事象の意味記憶に基づく想起であるから、質問項目に各事象における感情や知覚的詳細からしか判断できない内容が含まれているなら、その意味記憶に基づいた（observer視点での）シーン“再構成”に対して評定が生じるであろう。この場合、（bc-1）とは異なって、その質問をしたことによって、そのような評定が生じたことを考慮しなければならない。もしそのような質問がなされなかったなら、回答者は自分自身について、そのような意識は持たなかった可能性があるということになる。検証しようとしている理論にもよるが、（bc-2）の可能性があるときは、本人が自生的に自分をそのようにとらえている（いた）という前提を置くことはできないので、理論・仮説の確証・反証の結論を保留する必要があるだろう。そのような場合には質問紙外のソースによる補足データが必要となろう。

さらに（bc-3）の場合には、すでに自己像スキーマになっている意味記憶の評定であり、ここで生じるのは評定尺度のどの値を割り当てるかという判断だけになる。すると測定自体については（bc-1）の場合と同様の考慮でよいということになろう。ただし、この場合、“あのとき自分は問題への対処から逃げた”とか“自分は人づき合いが好きではないなあ”というような何らかのメタ認知的処理がすでに生じた結果の記憶だという可能性が強い。言いかえると、現時点でその時々を意識している自分とはズレている内容であるかもしれない。これはいわゆる潜在的態度（implicit attitude:e.g., Nosek,2005;Wilson, Lindsey, &

Schooler, 2000) と意識的態度の区別とは異なる。潜在的態度は、意識していない（あるいはできない）が行動や判断に影響するものであり、例えば質問紙では“専業主夫に違和感はない”と答える人が、一見別のことを測定しているように見える課題で、“家事は女の仕事だ”という方に偏っていることが、反応時間の差あるいは交互作用によって検出される。この区別とは違って、ここではどちらも意識的なのであるが、その事象生起時点の意識体験が、すでに形成されている自己像スキーマと矛盾する場合があります。これを述べている。

以上の3つの場合が生じやすい質問の形式は以下のようになる:特定の具体的出来事に関する質問であるかどうか（“初めて成績が不可だったときに、あなたが感じたのは”）、ある事象の生起頻度に関する質問であるかどうか（“しばしば不安になりますか”）、そして直接自己像を尋ねているかどうか（“自分が冷たい人間だと思いますか”）である。

ただし、質問形式だけでは不十分であり、さらに質問セットごとに検討する必要がある。例えば頻度を尋ねていても、genericな意味記憶が成立していなければ、回答時点で特定のエピソード記憶を検索し続けることによって評定するかもしれない。また逆に自己像スキーマから回答したなら、実は頻度を答えているのではなく、“その傾向の強さ”に関する“思い込み”からの推定になる。

4. 周囲の人々やメディアとの比較

この2つについて質問紙の問題としては、機能的に区別する必要はないであろう。どちらにしても質問項目セットと回答者個人の現在・過去の出来事以外のソースからの影響である。これらについて関連の心理学研究をレビューしようとする膨大な作業になるが、むしろこの要因については、詳細を問わなければ質問セットの性質を検討するときの方法論の工夫に見える面があると思われ、その点のみを簡単に述べる。

前節での記憶に関する議論において、少なくとも3つの場合を区別する必要があると結論された。そし

てそのような検討を、質問紙の内部だけで行なうためには、データを操作するための何らかの外部変数を持ち込む必要がある。実験であれば例えば想起条件を変えろというような、何らかの刺激を呈示することによって回答が変動することを確認できる（しかもこれは固定効果であり、相関データではない）。そのようなことが難しい内容の質問セットである場合に、周囲の人等との比較が評定結果を変える可能性があるならば、それを比較条件に使うことができるのではないかと。

妻藤（2007c；2008c）は、生きがい感質問紙（近藤・鎌田、1998）の各質問文の一部を改変して高校2年生あるいは中学2年生のときに自分はどのようであったかという質問セットを作り、大学生一年生の現在について、元の質問文への回答とを比較した。このとき現在セットについて、生きがい感評定値の現在・過去差と各回答に対する確信度の現在・過去差の2つの値を関係づける尺度を工夫すると、その尺度は質問項目ごとの個人に渡る平均値に対して、かなり高い相関を示すことを見出した（2つのデータのどちらも、殆ど同じ値を示している）。つまり高校卒業後、大学に入学することによって生活が大きく変化することになるが、そのとき生きがい感自体の評定値が変化するだけではなく、評定値の変化（記憶の相違）とその評定がどの程度確からしいと思うか（メタ記憶の相違）の変化の2つの相関を各項目内で計算すると、この値は項目によって大きくばらついている。ところが、この値は評定値の個人に渡る平均値に対して、かなり高い相関を示すのである。このデータの解析は非常に複雑で別のテーマとして検討する必要があるため、この相関が何を意味するかの解釈には触れないが、このような相関が存在することだけからでも、個人に渡る平均値つまり社会的に多くの人に共通して起こる変化を反映する尺度が、各記憶の上に現れる現在と過去の相違自体と、その記憶へのメタ記憶に生じる時点差との関係に対して影響している可能性があると言える。つまりこの相関の存在は、大勢がいっせいに生活上の変化を経験する卒業・入学・新生活を利用して、周囲の

人々からの影響を質問紙の内部だけから推測していく方法論を開発できる可能性を示している。

5. 結論と要約

評定尺度測定の中で、特に主観的側面の測定について、結果に影響する可能性がある評定情報の種類をリストする試みが行なわれた。探索的研究を行なう前に必要だと思われる理論的検討が本稿の目的であった。

理論的に必要として挙げられたのは、質問紙内での項目セットが持つ回答の偏りと呈示順である。大半の質問紙では、回答者全員に同一の質問呈示順が用いられるが、理論的対立を検証する目的で用いられるときには、カウンターバランスが必須であると議論された。

また記憶、特に自伝的記憶に関する研究の動向を参照して、質問セットが次の3つのどれに相当する性質を持っているかを考慮する必要があるとされた: (a) “質問に回答している時点という意味での今現在、それに対して感じる内容”の評定である場合、(b) 最近の自分に関する評定、(c) 過去の自分に関する評定である。そして (b) と (c) については、さらに3つの場合分けが考えられる: (bc-1) *autonoetic*で、かつ*field (inside)*視点での想起が生じて、それに基づいて質問への回答を判断する場合、(bc-2) “そのようなことがあった”という記憶はあっても*noetic*な場合、あるいはシーンの想起があっても*observer (outside)*視点の場合、そして (bc-3) 自己像スキーマ (自伝的記憶の純粹に意味記憶になっている成分) を評定値に変換するだけの場合の3つである。これらの場合分け各々について、データから導かれる各種統計量の解釈への理論的制約あるいは解釈が適用できる範囲の制約について議論された。

周囲の人々やメディアから、評定の仕方への影響については、予備的考察にとどまるが、しかしこれを利用して質問紙の内部での工夫によって、上記の場合分けを推定する方法の開発は有望であると結論された。

引用文献

- Baddely, A.D. (2004). The psychology of memory. In A.D. Baddeley, M.D. Kopelman, & B.A. Wilson (Eds), *Memory disorders for clinicians*, pp.1-13, Chichester: John Wiley & Sons.
- Eiser, J.R. (1994). *Attitudes, chaos, and the connectionist mind*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Gilboa, A. (2004). Autobiographical and episodic memory — one and the same? : Evidence from prefrontal activation in neuroimaging studies. *Neuropsychologia*, 42, 1336-1349.
- Haubensak, G. (1992). The consistency model: A process model for absolute judgments. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 18, 303-309.
- Heaps, C.M., & Nash, M. (2001). Comparing recollective experience in true and false autobiographical memories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 27, 920-930.
- Kinder, A. & Shanks, D.R. (2003). Neuropsychological dissociations between priming and recognition: A single-system connectionist account. *Psychological Review*, 110, 728-744.
- 小嶋外弘 (1975). 質問紙調査法の技法に関する検討. In 続有恒 & 村上英治 (Eds). *心理学研究法 9: 質問紙調査法*. 東京大学出版会.
- 近藤勉・鎌田次郎 (1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成. *健康心理学研究*, 11, 73-82.
- Lagnado, D.A. & Sloman, S.A. (2004). Inside and outside probability judgment. In A.J. Koehler & N. Harvey (Eds), *Blackwell Handbook of Judgment & Decision Making*, Pp.157-176, Oxford: Blackwell.
- Moscovitch, M., Rosenbaum, R.S., Gilboa, A., Addis, D.R., Westmacott, R., Grady, C., McAndrews, M.P., Levine, B., Black, S., Winocur, G., & Nadel, L. (2005). Functional neuroanatomy of remote episodic, semantic, and spatial memory: a unified account based on multiple trace theory. *Journal of Anatomy*, 207, 35-66.
- Nosek, B.A. (2005). Moderators of the relationship between implicit and explicit evaluation. *Journal of Experimental Psychology: General*, 134, 565-584.
- 織田輝準 (1978) 評定尺度による判断過程の研究. *教育心理学研究*, 26, 142-151.
- Parducci, A. (1965). Category judgment: A range-frequency model. *Psychological Review*, 72, 407-418.

- Parducci, A. (1982). Category ratings: Still more contextual effects! In B. Wegener (Ed), *Social attitudes and psychophysical measurement*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum. Pp.89-105.
- Parducci, A. (1992). Comment on Haubensak's associative theory of judgment. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 18, 310-313.
- Petrov, A.A. & Anderson, J.R. (2005). The dynamics of scaling: A memory-based anchor model of category rating and absolute identification. *Psychological Review*, 112, 383-416.
- Piolino, P., Desgranges, B., Clarys, D., Guillery, Girard, B., Taconnat, L., Isingrini, M., & Eustache, F. (2006). Autobiographical memory, autonoetic consciousness, and self-perspective in aging. *Psychology and Aging*, 21, 510-525.
- Richards, J.M. & Gross, J.J. (2006). Personality and emotional memory: How regulating emotion impairs memory for emotional events. *Journal of Research in Personality*, 40, 631-651.
- 妻藤真彦 (1992). 根拠を述べるができない確信と「意識様態」. 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要, 38, 1-10.
- 妻藤真彦 (1994). 機能的にとらえられない「意識」の性質の存在可能性. 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要, 39, 21-30.
- Saito, M. (1998). Fluctuations of answer and confidence rating in a general knowledge problem task: Is confidence rating a result of direct memory-relevant-output monitoring? *Japanese Psychological Research*, 40, 92-103.
- 妻藤真彦 (2000). 確信度理論の展望. 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要, 45, 1-9.
- Saito, M. (2003). Two modes of confidence rating: An effect of episodic information of participant's own past responses in a repeated-question paradigm. *Japanese Psychological Research*, 45, 94-99.
- 妻藤真彦 (2004). 確信度評定のメカニズムと理論的問題. 風間書房
- 妻藤真彦 (2006). 尺度評定過程への入力情報の問題. 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 51, 1-10.
- 妻藤真彦 (2007a). 認知・学習過程の理論的観点から見た尺度評定と潜在的測定の関係. 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 52, 1-10.
- 妻藤真彦 (2007b). 質問紙評定過程における参照情報－他者行動の評定－. 心理学研究, 77, 541-546.
- 妻藤真彦 (2007c). 記憶に基づく自己評定の確信度変動と評定値の関係. 日本心理学会 71 回大会発表論文集, 583.
- 妻藤真彦 (2008a). 尺度評定と評定の確信度との関係: 質問セットによる相違のシミュレーション. 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 53, 39-46.
- 妻藤真彦 (2008b). 自己評定における記憶の問題: 評定値と確信度の関係. 日本心理学会 72 回大会発表論文集, 743.
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性. In 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (Eds), 自伝的記憶の心理学. 北大路書房.
- 椎名乾平 (2008). カーソルの軌跡を用いて評定判断過程を分析する. 早稲田大学教育学部: 学術研究——教育心理学編——, 56, 1-9.
- Squire, L.R., & Knowlton, B.J. (1994). Memory, hippocampus and brain systems. In M. Gazzaniga (Ed), *The cognitive neurosciences*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Tulving, E. (1983). *Elements of episodic memory*. Oxford: Oxford University press. 和訳: タルビングの記憶理論, 太田信夫訳, 1985, 教育出版.
- Tulving, E. (2002). Episodic memory and common sense: How far apart? In A. Baddeley, M. Conway, & J. Aggleton (Eds), *Episodic Memory: New directions in research*. New York: Oxford University Press.
- Wedell, D.H., & Parducci, A. (1988). The category effect in social judgment: Experimental ratings of happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 341-356.
- Wilson, T.D., Lindsey, S., & Schooler, T.Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review*, 107, 101-126.